学生が先生を採点する話

小 倉 義 光*

先日の新聞に，筑波大学では教官の講義を学生が採点するという提案があり，賛否両論の議論が起っているという記事があった．こうした議論は他の大学でも起るかも知れず，わが気象学会でも多くの大学の教官や学生・院生が会員になっている．それでイリノイ大学での私の体験を述べ，話題を提供したいと思う．

1. どう実施するか

イリノイ大学には学部学生・大学院生併せて約3万5千人おり，約95の教室にわかれている．講義の学生による採点は毎学期，最終試験の前，最後の講義の時間に採点表を配布し，もちろん無記名で学生に記入してもらう．それを学生の一人が集め，教室の事務員に届ける．最終試験が終り教官が学生の採点を終った時に，はじめて教官は自分が学生にどう採点されたを知ることができる．学生の採点が教官の採点をバイアスしないための配慮である．

その採点表は25項目から成る．各々の項目について，excellent, very good, good, poor, very poor の5段階のどれか相当する丸印を黒く塗りつぶす．最も重要な項目は最初の二つ，全体として教官（コースのインストラクター）の授業の有効性 (effectiveness) および全体としてコースの質 (quality) である．その他の項目は微に入り細をうがっている．中にはどうかと思うものもあるが，例えば，そのコースの主題についての教官の知識，コースや材料の提供 (presentation) のしかた，教室で学生に主体性を持たせた程度，学生に接する教官の態度（これは重要な項目だと思う．学生は教官が自分達のことを care しているかどうかに敏感で，教官と学生がしっくりして，何とはなしに一体感があるクラスもあるし，両者がお互いに無関心のまま終るクラスもある），教官はどの程度講義の準備をしてきたか，教官は明瞭にしゃべるか，難しい点をよく説明したか，学生の質問にていねいに答えたか，教科書は適切か，宿題は適量だったか，中間試験やクイズについては，難し過ぎなかったか，採点は公正であったと思うか，講義の量も適切で教官が欲ばり過ぎなかったかなどである．最後の二問も総合的な評価で，この講義を採ることを他の学生に奨めるか，この分野の問題解決の能力を増大し得たかである．私としては，この講義は学生をインスパイアしたか，知る喜びを感じたかなどを尋ねてみたい気があるが，前述の設問のどれかに含まれているのかも知れない．いずれにせよ，この採点表は光学的に読みとられ，直ぐ集計される．

またこの採点表には空欄があり，学生が自由にコメントできるようになっている．私ではないが，The best course I have ever taken on this campus などというコメントをよく貰っていた教官もいる．その反面，ある教官が他のことで忙しく，講義に遅れてきたり，手ぬきをしたコースでは，てきびしいコメントが多く書かれていた．

大気科学教室では，こうした全学共通の採点表に加えて，アンケート調査も実施している．やはり毎学期の最後の講義の時間に，いくつかの項目について無記名で答えてもらうのである．その項目は，講義のどの部分でおそ過ぎ・はや過ぎがあったか，どの部分で退屈したか，つけ加えてほしいトピックがあるかなど，このコースを改善するのには，どうしたらいいかを尋ねるのである．

こうしたアンケート調査まで実施する背景は次の通りである．大学当局は必修・選択コースを併せて，各教室が毎学期何名の学生を教えたか絶えずモニターしている．その頭数は各教室の予算配分にいつか，ある程度反映するし，引き続いてある決められた最低数の学生がとらないコースは廃止される．わが国にくらべて米国の大学教育では選択コースが多い．大気科学教室でも学部学

* Y. Ogura, イリノイ大学名誉教授・日本気象協会顧問.

生用にいくつかの選択コースをだしている．必修コースならば最低限の授講者数は確保できるが，選択コースは完全にお客あってのコースである．それに教官たるもの，せっかく時間をかけて講義しているのだから，それが学生にアピールした方がいいに決まっている．それで教官はこの採点表とアンケートをかなり真剣に受けとっている．

各教官が多年の勉学によって得た知識が講義の中のいたる所にちりばめてあり，ピヨピヨの学生にそれが正しく評価できるかという危惧はあるかも知れない．しかし学生は学生なりに各教官の学問業績についての知識は持っているようである．

2. どう利用するか

こうして採点表とアンケートは教官の授業を改善するのに役に立っていると思う．問題の一つは大学当局がこの学生による採点を大学の運営にどう利用しているかであろう．イリノイ大学では助教授から準教授，準教授から教授への昇進は，各教室の head または chairperson がそれを学部長に推薦することから始まる（わが国と違って，教授や準授教がやめなければ準教授や助教授が昇進しないということはない）．その際には推薦の根拠になる大部の資料を揃えるが，その中に当該教官のこれまでの学生による採点を加えることが義務づけられている．ここが大学当局（学部長から上の層）が個々の教官の採点薄に目を光らす時機である．

ここで重要なのは，学生の採点は教室における授業に対する採点であり，それを教官の全活動の中で正しく位置づけをすることだと思う．例えばある教官がある学期にただ一コマ（1週間に3～4時間の講義）の授業しかしなかったとしよう．これが大気科学教室では標準的な授業負担量である．学生の採点を大学当局が重視しているからといって，それだけに全力をあげたらどうだろう．

大気科学教室では，理・工学部の他の教室にならい，1コマの授業は1週間40時間の勤務時間の1/3に相当すると規定している（全く新しいコースを教える時には，この割合は大きくなる）．残りの2/3は教室外の授業（院生の論文指導など），研究，学内外へのサービス（委員会や審議会，学会誌論文や NSF への研究費申請書のレヴイューなど）にあてることになる．院生の指導は重要な項目であり，上記の昇進推薦の資料には，これまで何人の修士・博士を指導卒業させたか，彼らが現在どんな職・地位についているかまで記入する．院生1人当りの指導は，院生の進歩段階によって違うが，勤務時間の8～12%に相当するとする．

なんだかずい分機械的なようであるが，こうして数字で示さないと，前記のように1コマの授業に全力をあげるのは，教室の方針に沿わないことを示し，また研究オンリーの研究所員と研究の生産性を比較する根拠がない．研究の質と量については別途に記述する．とにかくこうした結果，私が推薦した昇進は例外なしに大学当局で承認されており，私の知る限り，学生による採点が大学当局による不当な管理に利用されたという証拠はなかった．

第24回「夏季大学テキスト」販売について

去る7月24日～27日，気象庁講堂において行われました夏季大学のテキストを希望者におわけいたします．

記

テキスト名： 第24回夏季大学「海と大気」

販売価格： 1部1,500円

申し込み方法： 代金を添えて必要部数を申し込んで下さい．（郵便振替 東京 3-5958）

申し込み先： 〒100 東京都千代田区大手町気象庁内
日本気象学会
Tel. (03) 212-8341（代）